十四歳の少年が感じたこと

粕屋郡須恵町　　松山　剛

私は太平洋戦争中、久留米市野中町に住んでいた。昭和２０年６月１９日、近所の人から博多が燃えているとの連絡がある。夜だったが、外に出てみると北方面が真っ赤になっており相当な時間続いたようで、直感的に福岡の市民は大騒動だろう、久留米も攻撃されたら怖いとゾッとした。

隣組では時々火災防止の訓練をしており、木製のハシゴを家の屋根にかけて井戸から水をバケツに汲み上げて、タライ回しをする。私はモーターなどを利用して消火活動ができないものかと感じていた。

空襲警報がたびたびあり、サイレンが鳴り始めると、電灯に黒い布をかぶせて防空壕に入ることになっている。米・醤油・水・味噌・ロウソクなどは常時ストックがある。父は絶対に入らなかった。何故だろうと子供心に真剣に考えていた。住まいの床下に壕を作っていたので、火災になったら全員黒コゲになっただろう。焼夷弾のものすごい威力の前には役にたたないと思う。

家の天井は取り除くよう指示があり、板は無かった。今までかけ回っていたネズミはどこへ『疎開』したのだろうかと思った。

中学校（旧制）へ行く時は足にゲートルを巻いて素足。木銃を担いでおり、女性はモンペ姿に防空頭巾が一般的であり、学校では少尉クラスの士官が常駐している。木銃を使って戦争ゴッコをやらされて汗だらけになる。士官の名前は武井さんと言っていたが、非常に熱心に指導してくれた。今の子供達が、突然この姿を見れば、びっくりするだろう。

太平洋戦争は戦略物資の消耗戦ともいえる。兵器生産の金属が不足していて、各家庭から鍋・釜・指輪、それに学生服のボタンまで供出したこともある。

久留米市の御井町に工兵隊があった。父母の出身地の人が「明日入隊するので、泊めてください」と時々訪ねて来ていた。出発の朝笑顔で礼を言いながら、顔のどこかに淋しいものが感じられる人もいた。地理が分からないため父が車で送っていた。

家の前の国道を深夜に工兵隊の大部隊が靴音整然として行く。出征のため国鉄久留米駅まで歩いたらしい。あの兵隊さんは外地へ行ったのだろうが、各人の胸中を駆け巡ったのは何だったか。どれくらいの人が生きて帰ることができたのか、時にはふっとそんなことを考える。

私は学校から工場に動員された。国鉄久留米駅から久大線で４駅先の草野駅で降車。造り酒屋の倉庫を利用したもので、兵隊の被服関係の作業である。ある日、私達が乗って走っている列車にアメリカ軍機が襲いかかってくる。「ダダーン、ダダーン」と銃の発射音、学生は騒然となったが満員のためどうしようもない。幸いにすぐ去って行くが学生仲間の１人が腕を貫通される。

「きょうは久留米のゴム工場へ作業に行く」と母に告げて出掛ける。昭和２０年８月１１日、運悪くアメリカ軍機が久留米の市街地を襲う。私が動員されたゴム工場にも「ヒューン、ヒューン」と焼夷弾が投下されて大火災になる。母は駆け回って、私の安否を気づかったようである。「お母さん、ただいま」、夢中で家へ逃げ帰ると「よかった、よかった」と泣きながら喜んでくれた。この時の母の顔は終生忘れることはできない。

この母が亡くなって４５年、４２歳の若さである。戦後、社会不安の中で「これから、どうなるの」と母の真剣な問いかけに、「なるようにしかならん」と世の中を諦観し達観したように答えた父の言葉が記憶に残っている。この父も逝って２７年になる。

戦争の終結で日本本土に占領軍が進駐し、久留米にも駐留。この占領軍が住民に対して暴行を加えるという噂が加速度的に広がっていく。「きのうは白山町の住宅に押し入って２人にケガをさせた」など、不安は大きくなる。父は相当考えていたようだが、子供が小さいので一家あげて疎開することを決める。父の生まれ故郷である長崎県の喜々津村へ行くことになった。父、母、子供８人の計１０人が、木炭トラックに必要な荷物を積み込んで出発。途中、肥前山口付近で木炭を入れ替えて約４時間かかって到着する。

占領軍の噂は１週間ほどで無くなり、単なる噂だったと思われる。

復員引揚げ、物資不足、ヤミ市など、社会不安はおさまらない。戦後４０年以上たっても中国の残留日本人孤児の内親捜しが続く。肉親との出会いをテレビ中継する場面は、すばらしい感動がある。お互い言葉は通じなくても、心と心の結びつき。「マーマ」「長い間すまなかった」と手をとり合って喜ぶ親子の姿は、生きることの尊さを教えてくれる。これ以上の劇的なドラマはない。

しかし、肉親と会えなかった人の胸中は複雑で、だれも理解できないだろう。

一期一会の『ふれあい』さえも期待できないとしたら、人間として悲しい運命を感じる。もっと早い時期に日本から中国へ出かけて捜すことはできなかったのだろうか。

母の顔、肉親と会えた中国残留日本人の顔。いずれも戦争の結果であり、生きていて欲しいという夢、戦争という残がいの現実が入り交じった笑顔である。

永遠に平和であってもらいたい。もう二度と戦争を起こしてはいけない。今でも、発展途上国では内乱が続いているところがあるが、これから戦争があれば人類の絶滅、地球に大きな異変が発生することは確実だ。世界で唯一の核被爆国である日本は、総力をあげてこの地球から核爆弾を廃絶する運動を展開していくべきだろう。